

2017年版学習指導要領から 令和の日本型学校教育へ

上智大学 奈須正裕

2017年版學習指導要領

2017年版学習指導要領の特徴

- ▶ 科目編成や内容に関わって：
 - 道徳の教科化
 - プログラミング教育の必修化
 - 小学校における英語の教科化
 - 高校における科目の全面的再編成
 - ・・・小中の在来の教科等の内容・時数は基本的に変化なし
- ▶ 学力論に関わって：
 - 社会に開かれた教育課程
 - 資質・能力を基盤とした学力論への拡張
- ▶ 教育実践に関わって：
 - 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニングの視点)
 - カリキュラム・マネジメントの展開

学力論の2つの系譜

- ▶ 「内容」を基盤とした学力論

コンテンツ・ベース

「何を知っているか」

A問題的学力

- ▶ 「資質・能力」を基盤とした学力論

コンピテンシー・ベース

competencies = 「有能さ」・・・対象や場面と適切に関われる

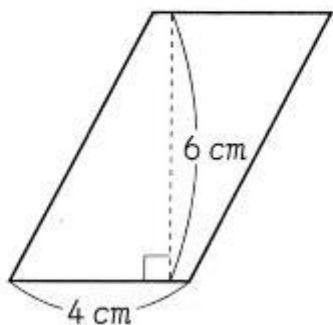
「どのような問題解決を現に成し遂げるか」

B問題的学力、PISA型学力 → 高大接続改革

全国学力・学習状況調査：A問題とB問題

次の図形の面積を求める式と答えを書きましょう。

(1) 平行四辺形

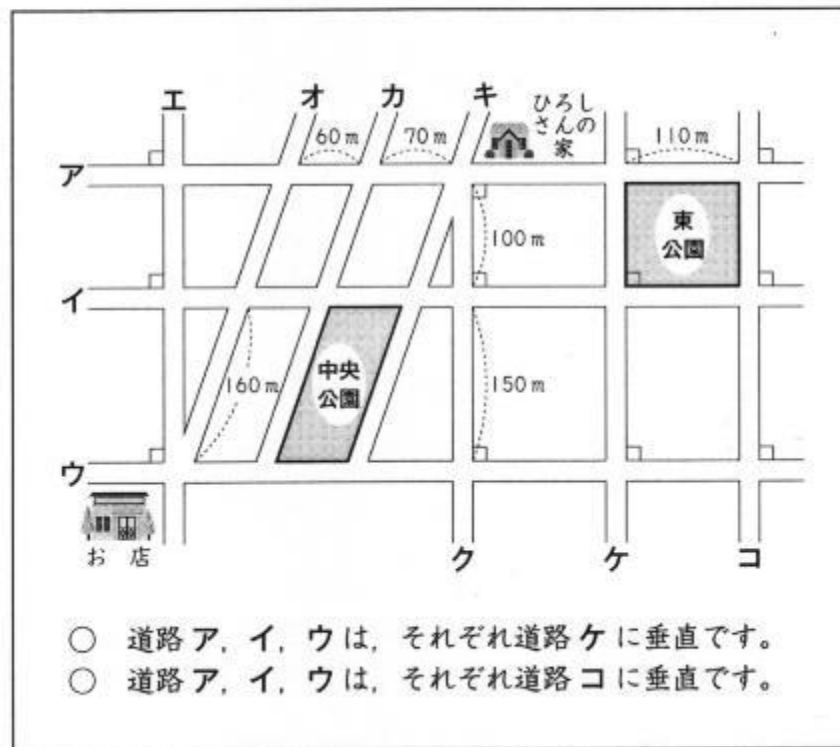


6年生算数のA問題(上)とB問題(右)
 (平成19年度全国学力学習状況調査より)
 正答率：A問題 96%、B問題 18%

(3) ひろしさんの家の近くに東公園があります。

東公園の面積と中央公園の面積では、どちらのほうが広いですか。

答えを書きましょう。また、そのわけを、言葉や式などを使って書きま
 しょう。



資質・能力(コンピテンシー)への注目

- ▶ マクレランドの発見:コンテンツ・ベイス・テストの成績は将来の成功を予測しない(1970年代)
- ▶ 成功を予測した指標:達成への意欲、感情の自己調整能力、問題解決力、対人関係能力、コミュニケーション能力…

- ①優れた問題解決に必要な十分な要因=コンピテンシー(資質・能力)による学力論の再定義
- ②非認知能力の学力論への組み入れ要求
- ③汎用的認知スキル(思考力・判断力・表現力等)の重視
- ④知識・技能の質的改善:暗記的知識から活用の効く知識へ、要素的知識から統合化された知識へ

マシュマロ・テスト

- ▶ ミシェル が、4歳児に行った実験(1970年代)
- ▶ 今なら1個、15分待てたら2個のマシュマロがもらえる
- ▶ 1/3の子供が2個のマシュマロを獲得
- ▶ 成人後の追跡調査:
 - ①身体的・精神的健康、青少年期の問題行動・社会適応を予測
 - ②大学進学適性検査(SAT)のスコアに影響
(2400点満点中210点の差)
- ▶ 非認知能力の重要性に加えて、幼児教育の質が生涯にわたる可能性を示唆
- ▶ 非認知能力の教育可能性:感情・行動の自己調整

育成すべき資質・能力の三つの柱

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

何を理解しているか
何ができるか

知識・技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

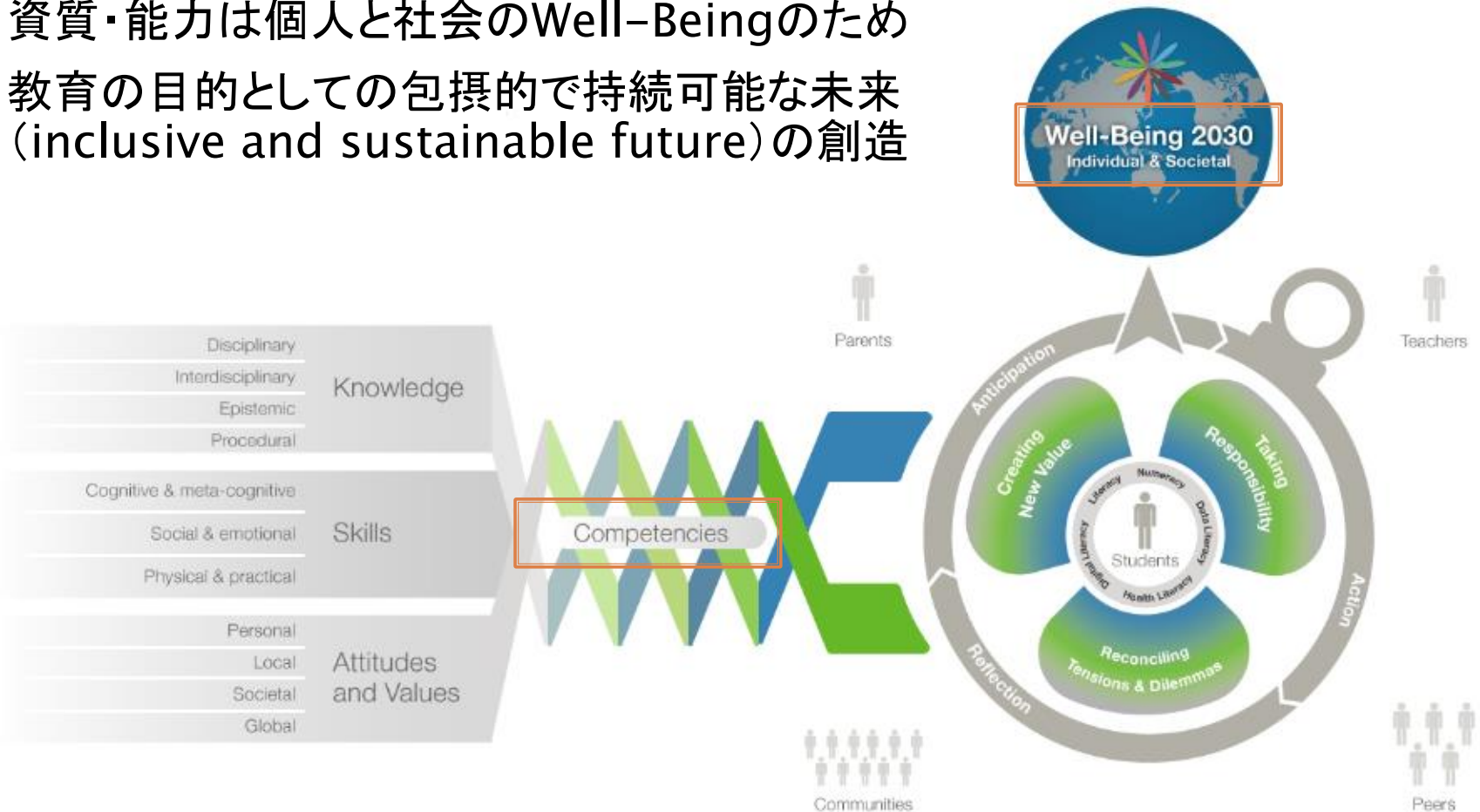
なぜ今、コンピテンシーなの？

- ▶ 子どもたちの**65%**は将来、今は存在していない職業に就く(キャシー・デビッドソン)
- ▶ 今後10年～20年程度で、**47%**の仕事が自動化される可能性が高い(マイケル・オズボーン)
- ▶ **2045年**には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に到達する可能性がある

- ▶ 要素的な知識・技能の価値の低下
- ▶ 「型にはまった仕事」が機械に取って代わられる
- ▶ とはいえ、コンピュータは人間とは異なる
- ▶ 人間にこそ出来ることを、今後の学校教育は目指すべき
- ▶ 価値の判断・創造、意思の決定、多様な他者との協働・・・
- ▶ 従来型の教育には、人間の「機械化」の側面があった
- ▶ AI化の進展、Society5.0は、教育の「人間化」の好機

OECD Learning Framework 2030

- ▶ 資質・能力 (Competencies) は、ゴールではない
- ▶ 資質・能力は個人と社会の Well-Being のため
- ▶ 教育の目的としての包摂的で持続可能な未来 (inclusive and sustainable future) の創造



教育の目的としての「持続可能な社会の創り手」

- ▶ 幼稚園から高校までのすべての学習指導要領等の「前文」:
- ▶ 一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、**持続可能な社会の創り手**となることができるようにすることが求められる
- ▶ 1947(昭和22)年制定の教育基本法第1条「平和で民主的な国家及び社会の形成者」以来の言及？

「社会に開かれた教育課程」

・・・主体として「変革」を生み出せる子どもの育成

- ▶ 社会に開かれた教育課程
- ▶ 1) 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと
- ▶ 2) これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓ひらいていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと
- ▶ 3) 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること

上からの改革も進んできた

- ▶ 「大学入試があるから」という言い訳の消失
- ▶ すでに私立大学入学者の半数近くがAO・自己推薦など総合型選抜
- ▶ 国立大学でも総合型選抜の割合が増加
- ▶ 「青田刈り」「定員確保」だけでなく、実際にコンピテンシーが結構あてになるから
- ▶ 1～3月期の一般入試は大幅に縮小？
- ▶ 多様な指標や方法による入試選抜は欧米では普通

令和の日本型学校教育

2017年版学習指導要領と「令和の日本型学校教育」

- ▶ 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
（2021年1月26日 中央教育審議会）
- ▶ 学習指導要領の着実な実施のために必要な条件整備
- ▶ 改訂作業の途上で生じた様々な変化への対応の必要性
 - 1) GIGAスクール構想に伴う一人一台端末
 - 2) Society5.0
 - 3) 経済産業省「未来の教室」ビジョンへの返答
 - 4) コロナショックに伴って明らかとなった学校の役割と脆弱性
 - 5) 子どもの多様性に対するより手厚い対応 etc.

「日本型学校教育」

- ▶ 「学校が学習指導のみならず、生徒指導等の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて、子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、**子供たちの知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』**は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国から高く評価されている」(5頁)

「日本型学校教育」の課題① 正解主義

- ▶ 「我が国の教師は、子供たちの主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなり、『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある」(8頁)

「日本型学校教育」の課題② 同調圧力

- ▶ 「学校では『みんなで同じことを同じように』を過度に要求する面が見られ、学校生活においても『同調圧力』を感じる子供が増えていったという指摘もある。社会の多様化が進み、画一的・同調主義的な学校文化が顕在化しやすくなった面もあるが、このことが結果としていじめなどの問題や生きづらさをもたらし、非合理的な精神論や努力主義、詰め込み教育等との間で負の循環が生じかねないということや、保護者や教師も同調圧力の下にあるという指摘もある」(8頁)

「自立した学習者」へと育て上げる

- ▶ 「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、**自立した学習者**を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある」(13頁)
- ▶ 従来の「日本型学校教育」の課題
- ▶ 「正解主義」と「同調圧力」からの脱却
- ▶ すべての子どもを「自立した学習者」へと育て上げる

100年前に世界各地で誕生した個別最適な学びの源流



ドルトンプラン(1920年代)



奈良女子高等師範学校附属小学校
「独自学習」(1920年代)

「指導の個別化」と「学習の個性化」

- ▶ 「これからの学校教育においては、**子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、『個に応じた指導』を充実することが必要である**」(17頁)
- ▶ 「個に応じた指導」を、学習者の視点で再整理:「個別最適な学び」
- ▶ 個に応じた多様な教材・学習時間・方法等の柔軟な提供: **指導の個別化**
- ▶ 自分に最適な学びを自力で計画・実行できる子どもの育成: **学習の個性化**
 - ▶ 1)「学び方」の得意に気づき、自力で学び進められる
 - ▶ 2)「学ぶ領域」の得意に気づき、自分の世界を拡充していける

すべての子どもは幸せになる権利を有している

- ▶ 教室における子どもの多様性は、いよいよ高まっている
- ▶ 基本的人権としての発達権・学習権の十全な保障
- ▶ 子どもがうまく学べないのは、子どもの側に問題があるのではなく、カリキュラムや学習環境の側に問題＝改善の余地があると考えられるべきではないか: Universal Design for Learning という思想

どのような子どもの多様性が問題になっているのか

- ▶ 発達障害の可能性のある子ども 7.7%
- ▶ 不登校の子ども 1.0% (令和3年度統計では1.3%)
- ▶ 不登校傾向の子ども 11.8%
- ▶ 経済的に困難を抱える子ども(家にある本が少ない 29.8%)
- ▶ 海外にルーツをもつ子ども(家で日本語をあまり話さない 2.9%)
- ▶ 特定分野に特異な才能をもつ子ども 2.3%

内閣府総合科学技術イノベーション会議 Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ より
(chromeextension://efaidnbnmnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikuji
nzai/saishu_print.pdf)

- ▶ これらの子どもに可能な限りのサポートを行うのは社会の義務
- ▶ しかし、多様性はこれらの子どもたちだけの問題ではない
- ▶ 「特に困ってない」「何とかやれている」とされる子どもにも多様性はある

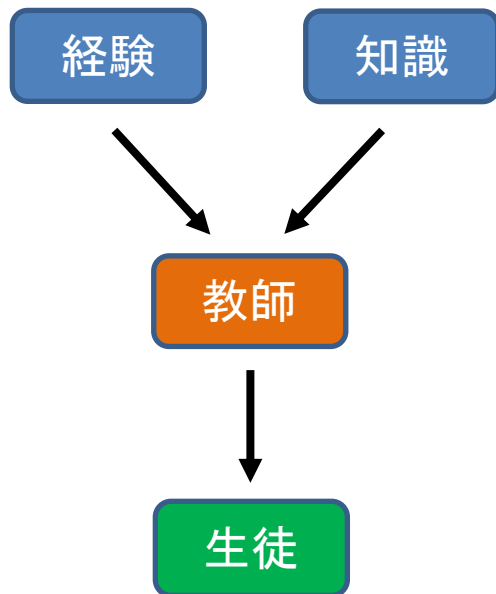
教える教育から環境を整える教育へ

- ▶ 全員の子どもが教師の目の前にいない: どうやって教えるの?
- ▶ 適切な環境さえあれば、子どもは環境に関わり学んでいく

幼児教育ではごく普通に実践されている

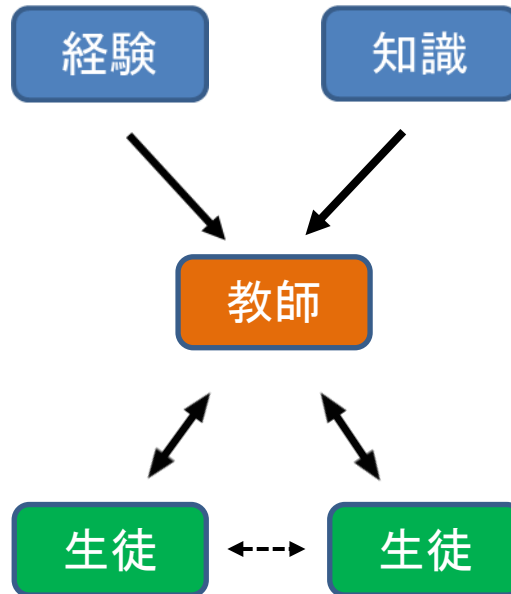


有能な学び手という子ども観に立ち、環境による教育を主要な方法としてきたから



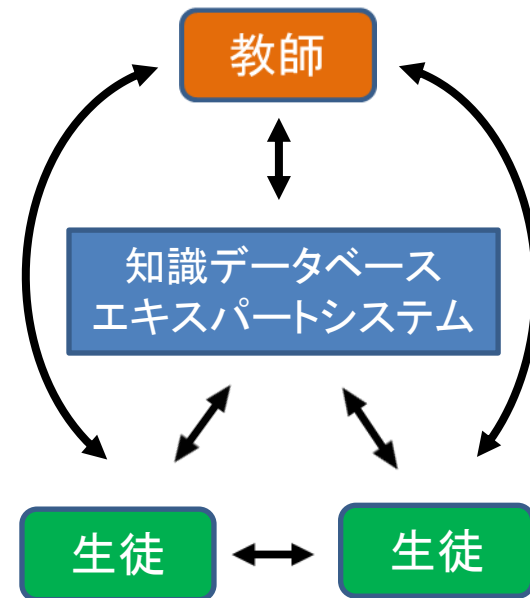
口頭継承パラダイム

- ・口頭による教師の経験や知識の一方的な伝達
- ・生徒にとっての情報源は教師
- ・生徒同士の相互作用はない



現在のパラダイム

- ・情報の伝達者及びゲートキーパーとしての教師
- ・教師と生徒には相互作用がある
- ・生徒間の相互作用は二次的なもの



情報技術パラダイム

- ・知識データベース等に、生徒も教師も等しくアクセスできる
- ・生徒間、生徒対教師の相互作用がある
- ・情報コントローラーとしての教師は姿を消し、生徒と教師が知識データベース等を取り囲む

学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson, 1990)

Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm.
Educational Technology, Vol.30, No.4, 7-10.

何を、なぜ、どのように学ぶのかの情報をすべて開示する

・・・指導案を子どもに手渡す

何を、なぜ、どのように学ぶのかを明確にする

6年理科 自由進度学習「てこのはたらき」
ガイダンスプリント

6年 組 名前

「疑問」その1

たかしくんとよしこちゃんのシーソー

見た目はふっくらしてるけど意外に軽い(体重30kg)、気の強い「よしこちゃん」。

見た目は細いけど意外と重い(体重70kg)、気の弱い「たかしくん」。
二人はいつも仲良しで、今日もシーソーに乗りました。

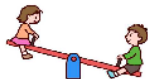
すると、よしこちゃんは「ちょっと、アンタ、そんなとこに座ってたらつりあわないでしょ！
少しは考えてすわりなさいよ！！」

と、たかしくんに言いました。それを聞いたたかしくん

はおろおろするばかり。

「どこにすわったらいいの？わかんない」と、今にも泣き出しそうです。

さて、たかしくんはどこに座ったらいいでしょう。



「疑問」その2

くぎ抜きのみみつ

「くぎ抜き」を使ったことある人いるよね。

どうして、こんなにかんたんに、くぎがぬけちゃうの？

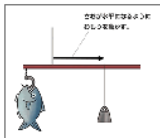


「挑戦」

「さおばかり」を作ろう。

昔から、人々はものを売買するときに「はかり」を使っていた。つりあいのきまりを利用した「さおばかり」です。

竹内先生も「さおばかり」を作ってみました。
キミも、正確な「さおばかり」を作って、竹内先生と勝負しよう！



さあ、この学習を終えて、疑問や挑戦をクリアしよう！

・学習場所「第2理科室」

・持ち物

色鉛筆、はさみ、ファイル、教科書



自由進度学習 理科「てこのはたらき」学習のてびき

名前

目標

(時間 8 時間)

利用可能な時数

- ・ぼうが水平につり合うときのきまりを調べる。
- ・「てこ」や「てこ」を利用した道具について調べる。
 - ★チェック 1 学習カード提出
- ・「さおばかり」か「てんびん」を作る。
 - ★チェック 2 作品の提出
- ・「てこ」のはたらきについて分かる。
 - ★チェック 3 チェックテスト

単元の目標と構成

評価＝チェックも
多様な方法で

学習の流れ

学習内容	教科書	理カド	理カド
① てこのはたらきについて調べる。	P72,73	理カド1	理カド1
② 力点や作用点の位置を変えると、どうなるかを調べる。	P74～75	理カド2	理カド2
③ てこ実験器で、どのようにすればつり合うかを調べ、つり合うときのきまりを考える。	P76～79	理カド2	理カド2
④ てこ実験器で、2カ所以上におもりをつり下げた場合について調べ、つり合うときのきまりを考える。		理カド3	理カド3
⑤ てこを利用した道具について調べる。	P80～83	理カド4, 5	理カド4
★チェック 1 学習カード1～5を先生に見せる。			
⑥ 「さおばかり」か「てんびん」を作る。	P81, 84	理カド6	
★チェック 2 作品と学習カード6を先生に見せる。			
⑦ チェックテストをやる。		チェックテスト	
★チェック 3 チェックテストを先生に見せる。			
~~~~~ ここまでは、かならず終わらしましょう。~~~~~			
発	☆ 支点が、力点と作用点の間にない「てこ」のしくみを調べよう。		
展	☆ たかしくんとよしこちゃんのシーソーの問題を解こう。		
学	☆ 学校の中にある「てこを利用した道具」を3個以上見つけよう。		
習	☆ 「もの作りカード」を参考にして、つりあいを利用した物を作ってみよう。		
	☆ 「てんびん」や「てこ」についてパソコンで調べてまとめてみよう。		

学習の流れと利用  
可能な学習材等

活動的・体験的な  
学びも取り入れる

早く進んだ子ども  
向けの発展学習

竹内淑子『教科の一人学び「自由進度学習」の考え方・進め方』黎明書房、2019年

# 教える教育から環境を整える教育へ

- ▶ 全員の子どもが教師の目の前にいない: どうやって教えるの?
- ▶ 適切な環境さえあれば、子どもは環境に関わり学んでいく
- ▶ もう1つの教育方法としての「環境による教育」
- ▶ 「教師が教える教育」に加えて「環境による教育」をレパートリーに
- ▶ その基底にあるのは、すべての子どもは生まれながらにして「有能な学び手」という子ども理解
- ▶ しかし、アナログでは膨大な紙の資料の準備など、イニシャル・コストの高さがネックになっていた・・・

# 教師が教える授業とは何だったのか？

- ▶ なぜ、従来の学校では子どもが自立的に学ばなかったのか？
  - ▶ 知識は偏在し、アクセスは容易ではなく高価だった
  - ▶ 知識は教師が準備し、教室に持ち込むしかなかった
  - ▶ その結果、教師から教わらないと学べない時代が長く続いた
  - ▶ 子どもは教えないと学ぼうとしない、学べないという「神話」の誕生
- 
- ▶ 学びの環境の変化・・・ICTの進歩と普及
  - ▶ 情報技術パラダイムへのパラダイムシフトが可能に

# 同期型と非同期型 × 対面と遠隔

- ▶ デジタルが時間と空間の制約から授業を開放する
- ▶ 「同期型コミュニケーション」(電話型):  
伝達側の都合で受け手側の時間を奪う  
コミュニケーションの機会は1回のみ
- ▶ 「非同期型コミュニケーション」(メール型):  
伝達側は事前にまとめて情報を提供  
受け手側は各自の都合とタイミングで何度でも情報を取得可
- ▶ 「対面」に加えて「遠隔」が可能に

## 同期型と非同期型 × 対面と遠隔

	同期型 コミュニケーション	非同期型 コミュニケーション
対面	従来型の一斉指導	環境による教育 「情報技術パラダイム」
遠隔	オンライン授業など	オンデマンド授業など

# 子ども観の転換と授業のパラダイムシフト

- ▶ 子どもは無能な怠け者：教師が仕切る教育  
→ 教師が教えなければ学ばない、学べない
- ▶ 教師の仕事は教授と管理  
→ 規律訓練の日常化・身体化
  
- ▶ 子どもは有能な学び手：環境による教育  
→ 適切な環境と出合えば、自ら進んで学ぶ
- ▶ 教師の仕事は学習環境整備と足場架け  
→ 一人ひとりに即した見とりと支援

